

## 2) 鳥類

### (1) 調査方法

#### ① 鳥類相調査

五木村及び相良村における鳥類の生息に関する既往の文献を整理した。

現地調査としては、調査区域内の主要な植生に設定した調査コースを早朝に歩行しながら、左右各 25 mの範囲内で確認された鳥類の種、個体数などを記録するラインセンサスを行った。また、日中と夕刻に、見晴らしのきく地点において 30 分間に確認された鳥類の種などを記録する定点観察調査を行った。このほかにも、調査区域内の尾根、谷、河川敷、樹林地、耕作地などの異なった生息環境において、夜間を含めて、目視などにより随時に調査を行った。

#### ② 個別調査

鳥類相調査により確認された種のうち、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成 4 年法律第 75 号)」の指定種などに該当し、重要な種であるクマタカ及びヤイロチョウ、「緑の国勢調査－自然環境保全基礎調査報告書(環境庁、昭和 51 年 3 月)」のすぐれた自然調査の対象動物などに該当するヤマセミについては、事業の影響の詳細な検討が必要と考えられたため、さらに詳細な調査を個別に実施した。

##### a クマタカの生息調査

鳥類相調査により確認されたクマタカについては、重要な種として(表 4.4.1.2-8)、また生態系の上位種としての観点から生息の実態について以下に示す詳細な調査を行った。

##### a) 現地調査

調査区域におけるクマタカの生息の実態を把握するため、調査区域全域を見渡せるよう尾根や谷に複数の調査地点を設定し、各地点に 1~2 名を配置し、1 回当たり 5 日間程度、対象範囲の規模によりおおむね 4~13 人、8 時頃~16 時頃まで同時観察を実施した。調査地点は固定して継続的に観察する地点と、クマタカの出現状況に応じて観察位置を変更する地点とを設定した。観察には 7~10 倍の双眼鏡や 20~60 倍の望遠鏡を使用した。

クマタカが確認された場合には、調査員相互に無線機で連絡を取りながら、時刻、雌雄、年齢、個体の特徴、行動(急降下して林などに飛びこむ、木などに止まって地表をあちこち見るなどの探餌行動、交尾、防衛行動、ディスプレイなどの繁殖活動に関係する指標行動を含む)などを記録すると同時に 1/25,000

または 1/50,000 の地形図に確認位置を記録した。また、クマタカ以外の重要な猛禽類が確認された場合も同様に記録した。

## b) 分析方法

現地調査により確認された飛翔状況や、探餌行動、繁殖活動に関係する指標行動などを地形図に整理し、クマタカの生息環境やつがいごとの行動圏の内部構造を分析した。

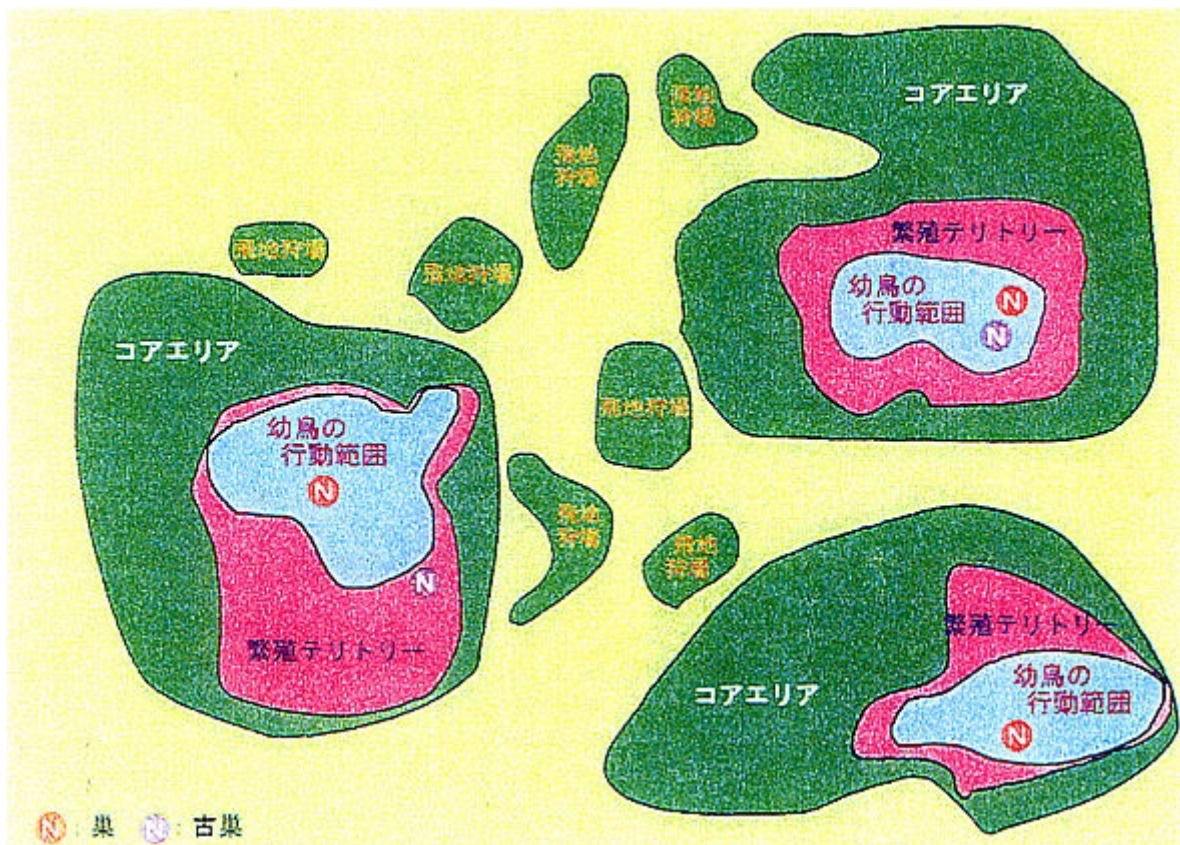
クマタカの行動圏の内部構造の定義と推定方法を表 4.4.1.2-5 に示し、それを模式的に図 4.4.1.2-5 に示した。内部構造の定義及び推定方法は、「クマタカ・その保護管理の考え方(クマタカ生態研究グループ、平成 12 年 4 月)」に準じ、目視による調査で推定した。クマタカ生態研究グループでは行動圏内部構造を幼鳥の行動範囲、繁殖テリトリー、コアエリア、コアエリア外の行動圏、遠出場所の 5 つに区分しているが、目視調査の場合、行動圏については「特定することは極めて困難」とされ、遠出場所については「特定不可能」とされることから、本調査では、コアエリア、繁殖テリトリー及び幼鳥の行動範囲を分析の対象とした。

表 4.4.1.2-5 クマタカ行動圏内部構造の定義と推定方法

コアエリア	定義	全行動圏の中で、相対的に利用率の高い範囲(周年の生活の基盤となる範囲)。1年間を通じて、よく利用する範囲。
	推定方法	<p>①目視調査による1年間の確認記録の多くが存在する範囲。</p> <p>* 特に繁殖期の行動記録のほとんどはこの範囲に含まれる。</p> <p>* 全記録の平均値以上から導き出した単なる高頻度利用域ではなく、定期的によく出現・行動する範囲。</p> <p>②巣の周辺の概ね約 7~8km<sup>2</sup></p> <p>* 外縁部の特定は困難であるので、尾根や谷などの地形を考慮して外周部分を推定する。</p> <p>③移動飛行ルート先のハンティングエリアとしての植生を含む。</p> <p>* コアエリア外側の近接地の飛び地的な狩場も含める。</p>
繁殖テリトリー	定義	繁殖期に設定・防衛されるテリトリー(ペア形成・産卵・育雛のために必要な範囲であり、繁殖期に確立されるテリトリー)。
	推定	<p>①繁殖期間の内、11月~3月の記録(つがいのデータを中心に解析)。</p> <p>* 産卵に至らない年は1月からのデータ。</p>

	方法	<p>②繁殖活動に関する指標行動の行われた場所。</p> <p>* 営巣地を含む約 3km<sup>2</sup>だが、尾根や主たる谷を考慮に入れて範囲を特定しなければならない。</p> <p>* 幼鳥の行動範囲はほとんどの場合、この範囲に含まれる。</p>
幼鳥(巣立ち雛)の行動範囲	定義	巣立ち後の幼鳥が独立できるまでの生活場所。
	推定方法	<p>巣立ち後の幼鳥の行動範囲(巣立ち後～翌年2月)。</p> <p>* 営巣木周辺に存在するが地形等により、正円ではなく、外縁は概ね巣から 500m～1km の範囲。</p>

注)「クマタカ・その保護管理の考え方」(クマタカ生態研究グループ、平成 12 年 4 月)に準じた。



注)「クマタカ・その保護管理の考え方」(クマタカ生態研究グループ、平成 12 年 4 月)を基に作成した。

図 4.4.1.2-5 クマタカ行動圏内部構造のイメージ

## b ヤイロチョウの生息調査

鳥類相調査により確認された重要な種のヤイロチョウについては(表 4.4.1.2-8)、その生息の実態を把握するため目視による観察を行った。

## c ヤマセミの生息調査

ヤマセミは水辺を主な生息域とし、川岸の崖などに巣穴を掘って営巣することから、ダム事業による営巣地や採餌場など生息域の一部減少などの影響が考えられる。このため、その生息の実態について、河川沿いを踏査しながら観察し、必要に応じて定点観察を行った。

### (2) 調査時期

調査時期は表 4.4.1.2-6 に示すとおりである。

表 4.4.1.2-6 鳥類調査時期

調査項目		調査時期
鳥類相調査		・昭和 52 年7、11 月 ・昭和 53 年2月 ・平成4年4、5、7、10 月 ・平成5年1月 ・平成7年 10 月 ・平成 11 年5、6月
個別調査	クマタカの生息調査	・平成5年3、4、5、6、11、12 月 ・平成6年1、2、3月 ・平成8年 12 月 ・平成9年1、2、3、4、6月 ・平成 10 年1、2、5、9、11、12 月 ・平成 11 年1、2、3、4、6、8、9、10、11 月 ・平成 12 年1、2、3月
	ヤイロチョウの生息調査	・平成9年6月 ・平成 10 年5、6月 ・平成 11 年6月
	ヤマセミの生息調査	・平成6年5月 ・平成 11 年6、7月

### (3) 調査区域

調査区域は図 4.4.1.2-6～図 4.4.1.2-9 に示すとおりであり、鳥類相調査、ヤイロチョウの生息調査及びヤマセミの生息調査では湛水予定区域とその周辺区域とした。また、クマタカの生息調査では、クマタカの生息環境やつがいの行動圏を分析する観点から、さらに広範囲を調査区域とした。

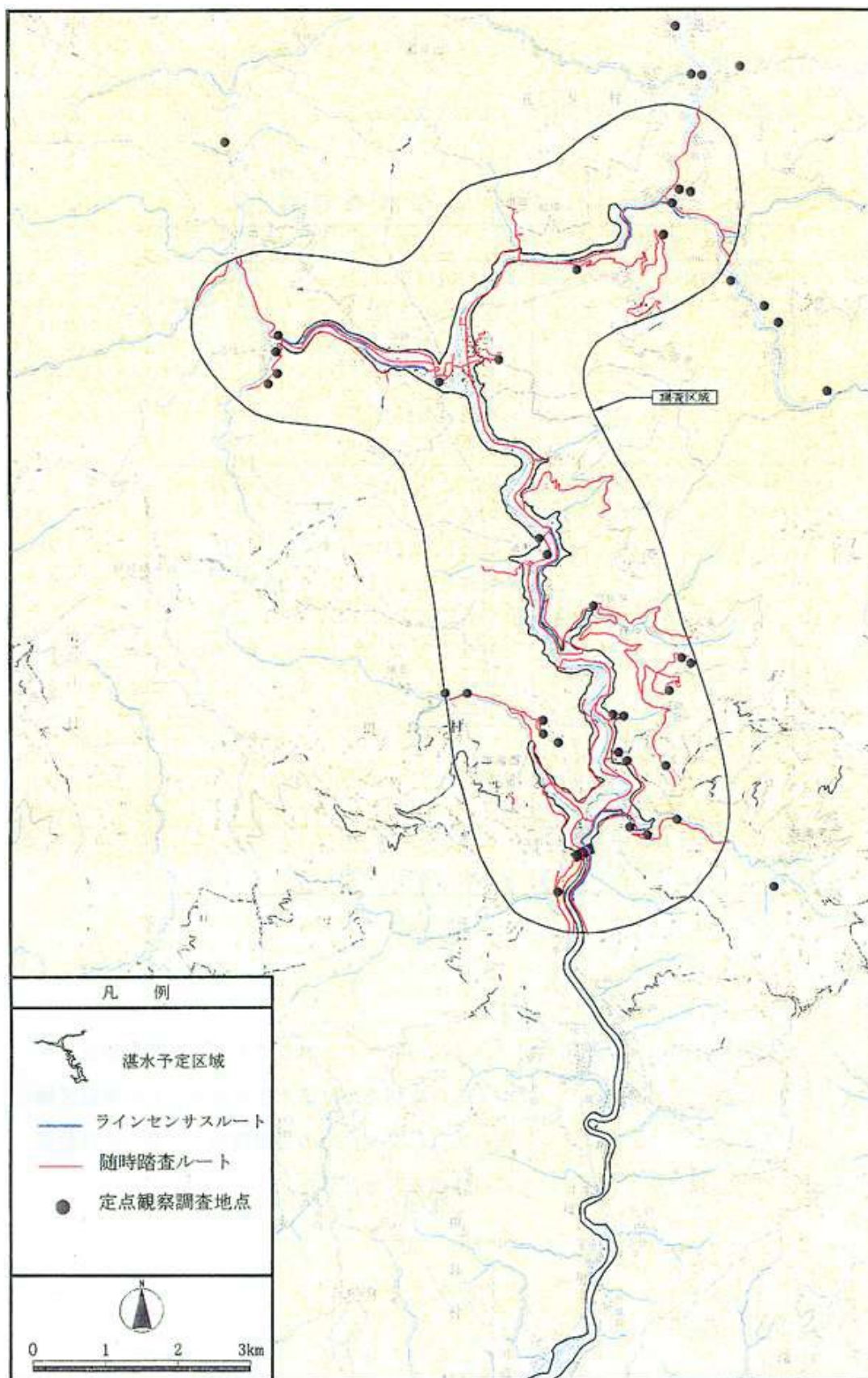


図 4.4.1.2-6 鳥類相調査の調査ルート及び調査地点

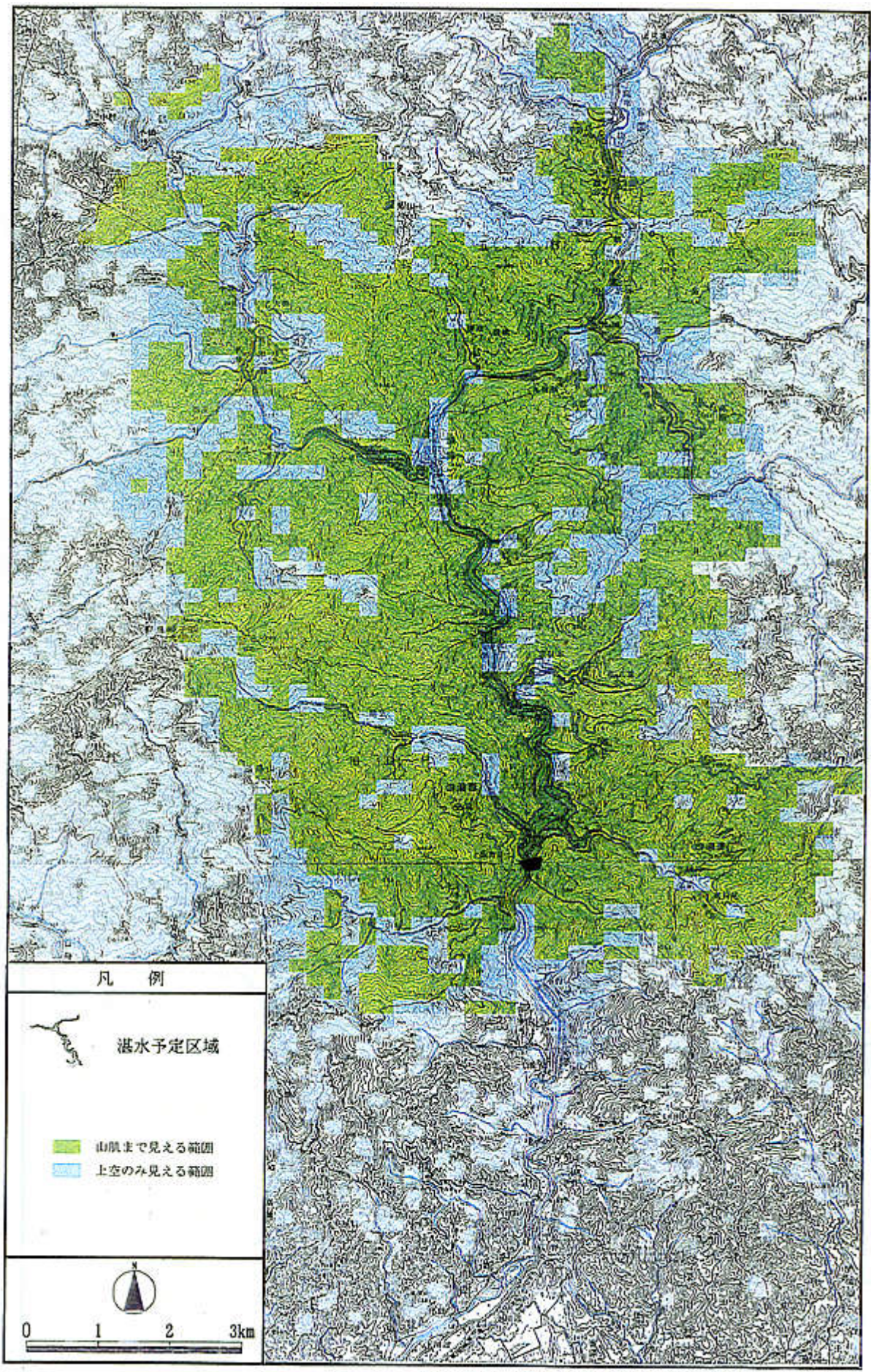


図 4.4.1.2-7 クマタカの生息調査区域及び視野範囲

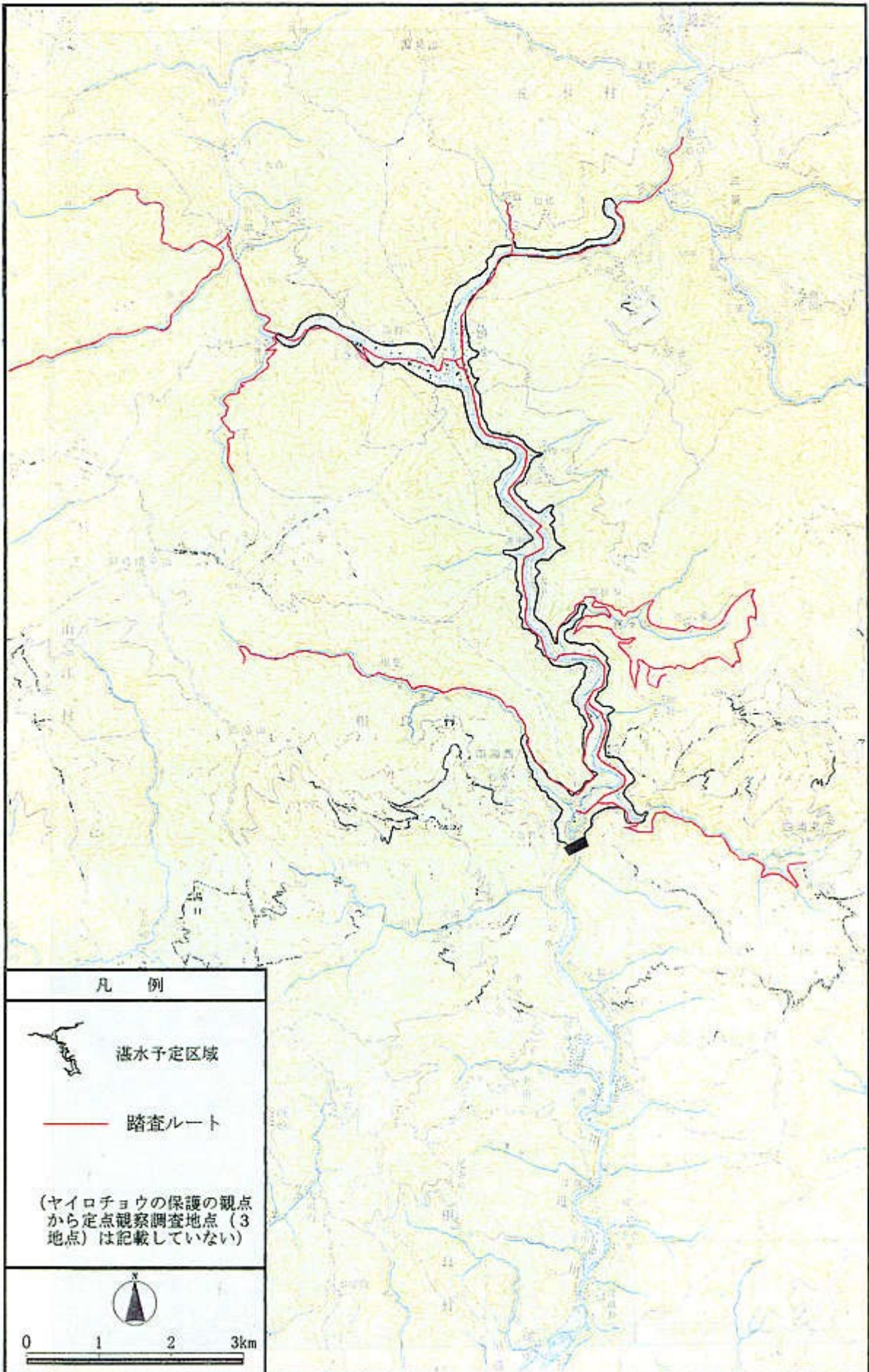


図 4.4.1.2-8 ヤイロチョウの生息調査の踏査ルート及び調査地点

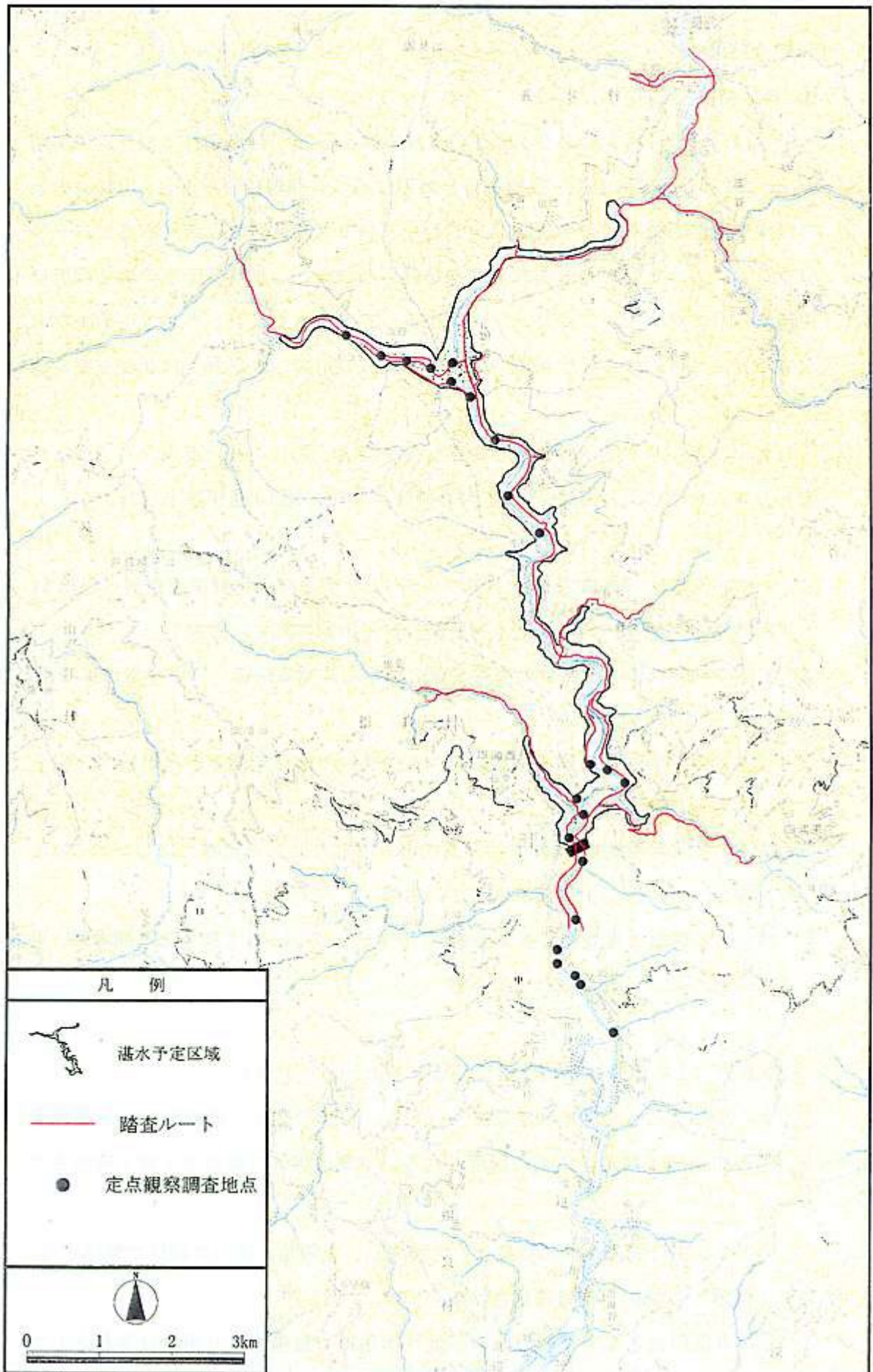


図 4.4.1.2-9 ヤマセミの生息調査の踏査ルート及び調査地点



#### (4) 調査結果

##### ① 鳥類相調査結果

表 4.4.1.2-7 に示すとおり、既往の文献では 133 種が記録されており、現地調査では 87 種が確認された。現地調査の結果に基づき種構成をみると、山林や山里の環境に適応したものが主体となっており、中でも森林性の小鳥であるヒヨドリやウグイス、カラ類などの占める割合が最も高かった。また、山地の森林環境に生息するクマタカ、ヤマドリ、ジュウイチ、アカショウビン、サンコウチョウなども確認された。さらに、溪流に生息するセキレイ類、カワガラスなども多く確認された。

なお、以下に示す①～⑤により重要な種を選定したところ、表 4.4.1.2-8 に示すとおり、文献においては 23 種、現地調査においては 13 種が該当した。

- ①「文化財保護法(昭和 25 年法律第 214 号)」、「熊本県文化財保護条例(昭和 51 年熊本県条例第 48 号)」により天然記念物に指定されている種
- ②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成 4 年法律第 75 号)」で指定されている種
- ③「熊本県希少野生動植物の保護に関する条例(平成 2 年熊本県条例第 61 号)」で指定されている種
- ④「環境庁報道発表資料 哺乳類及び鳥類のレッドリストの見直しについて(環境庁、平成 10 年 6 月)」に記載されている種
- ⑤「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと(熊本県、平成 10 年 3 月)」に記載されている種

現地調査による重要な種の確認状況は以下のとおりである。

ミサゴは留鳥として日本全国に広く分布し、海岸のほか、湖沼などにも生息する。川辺川流域では主に冬季に観察される。事業区域外の森林の上空で確認された。

ハチクマは主に九州以北に夏鳥として渡来し、丘陵地、低山の森林で繁殖する。事業区域外の森林の上空で確認された。

オオタカは留鳥として本州以北の平地～山岳地で繁殖し、九州には冬鳥として渡来する。湛水予定区域とその周辺区域の広い範囲で確認された。

ハイタカは留鳥として本州以北の平地～亜高山の森林で繁殖し、九州には冬鳥として渡来する。湛水予定区域とその周辺区域の広い範囲で確認された。

クマタカは留鳥として九州以北の山地の森林で繁殖する。湛水予定区域とその周辺区域において7つがいのほか、つがいを形成していない個体が確認された。

ハヤブサは留鳥として主に本州以北で繁殖し、冬には全国の海岸や河口、農作地に渡来する。川辺川流域でも冬季に観察される。頭地などの集落付近の上空で確認された。

アオバズクは九州以北に夏鳥として渡来し、全国の老木のある森林や社寺林、公園などで繁殖する。事業区域外の集落付近で確認された。

フクロウは留鳥として九州以北で繁殖し、老木のある平地～山地の森林や社寺林などに生息する。事業区域外の森林で確認された。

アカショウビンは九州以北に夏鳥として渡来し、溪流沿いのよく茂った森林で繁殖する。事業区域外の谷沿いの森林などで確認された。

ブッポウソウは本州以南に夏鳥として渡来し、山地の老木のある森林や社寺林などで繁殖する。事業区域内の老木の穴に営巣することが確認されたが、平成7年以降、営巣は確認されていない。

ヤイロチョウは主に西南日本に夏鳥として渡来し、照葉樹林または照葉樹林から夏緑樹林への移行地帯の暗い森林で繁殖する。事業区域外の溪流沿いの森林で確認された。湛水予定区域とその周辺区域に不定期に飛来しているものと考えられる。

サンショウクイは本州以南に夏鳥として渡来し、平地から低山の高木林で繁殖する。事業区域内外の森林で確認された。

サンコウチョウは本州以南に夏鳥として渡来し、暗い森林で繁殖する。事業区域内外の森林で確認された。

なお、ビンズイは「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと(熊本県、平成10年3月)」においてDD(情報不足)として記載されているが、湛水予定区域とその周辺区域においては繁殖の可能性が低いため、ここでは重要な鳥類として選定していない。

文献においてのみ記録されているヒシクイ、チュウヒ、ウズラ、タマシギ、コアジサシ、ヨタカ、コマドリ、クロツグミ、コサメビタキ、ノジコのうち、事業区域内で繁殖の記録があるものに、コサメビタキがある。コサメビタキは日本には夏鳥として渡来し、明るい広葉樹林や市街地の公園や民家の庭などに繁殖し、頭地付近で繁殖が記録されている。他の9種は、渡りの時期には事業区域に渡来する可能性はあるが、繁殖している可能性は低いものと考えられる。

表 4.4.1.2-7(1) 鳥類の確認種<sup>1)</sup>

No.	目名	科名	和名	学名	文献 <sup>2)</sup>	現地調査 <sup>3)</sup>			
						ライ セン ンサ ス	定点 観察	随時	渡りの 区分 <sup>4)</sup>
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	○			○	その他
2	ベリカン	ウ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	○				—

3	コウノトリ	サギ	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	○	+	○		留鳥
4			ササゴイ	<i>Butorides striatus</i>	○		○		夏鳥
5			アマサギ	<i>Bubulcus ibis</i>	○				—
6			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	○	+	○		留鳥
7			アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	○				—
8	カモ	カモ	ヒシクイ	<i>Anser fabalis</i>	○				—
9			オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	○	+			冬鳥
10			マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	○				—
11			カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>	○				—
12			コガモ	<i>Anas crecca</i>	○			○	冬鳥
13	タカ	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	○			○	その他
14			ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i>	○			○	夏鳥
15			トビ	<i>Milvus migrans</i>	○	++	○		留鳥
16			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	○		○		冬鳥
17			ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	○			○	留鳥
18			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	○		○		冬鳥
19			ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	○			○	冬鳥
20			サシバ	<i>Butastur indicus</i>	○	+	○		夏鳥
21			クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i>	○		○		留鳥
22			チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i>	○				—
23		ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	○		○		その他
24			チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	○		○	○	冬鳥
25	キジ	キジ	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i>	○				—
26			ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringii</i>	○			○	留鳥
27			キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	○		○		留鳥
28	ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	○				—

29			バン	<i>Gallinula chloropus</i>	○				—
30	チドリ	タマシギ	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i>	○				—
31		チドリ	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	○	+	○		夏鳥
32			シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	○				—
33		シギ	クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	○				—
34			タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	○				—
35			キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>	○				—
36			イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	○			○	冬鳥
37			ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	○				—
38			タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	○				—
39			カモメ	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	○			
40	ハト	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	○	++	○		留鳥

表 4.4.1.2-7(2) 鳥類の確認種<sup>1)</sup>

41	ハト	ハト	アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	○	+	○		留鳥
42	ホトギス	ホトギス	ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	○	+	○		夏鳥
43			カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	○			○	夏鳥
44			ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	○	+	○		夏鳥
45			ホトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	○		○		夏鳥
46			フクロウ	フクロウ	トラフズク	<i>Asio otus</i>	○		
47	コミズク	<i>Asio flammeus</i>			○				—
48	コノハズク	<i>Otus scops</i>			○				—
49	オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i>			○				—
50	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>			○			○	夏鳥
51	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>			○		○		留鳥

52	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	○				—
53	アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudacutus</i>	○			○	その他
54			ヒメアマツバメ	<i>Apus affinis</i>	○	+	○		その他
55			アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	○			○	その他
56	ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	○	++	○		留鳥
57			アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	○	+	○		夏鳥
58			カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	○	+	○		留鳥
59		ブッポウソウ	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	○	+			夏鳥
60	キツツキ	キツツキ	アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	○				—
61			アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	○	++	○		留鳥
62			オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>	○			○	留鳥
63			コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	○	++	○		留鳥
64	スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ	<i>Pitta brachyura</i>	○			○	夏鳥
65		ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	○	++	○		夏鳥
66			コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	○				—
67			イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>	○			○	夏鳥
68		セキレイ	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	○	++	○		留鳥
69			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	○			○	冬鳥
70			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	○	++	○		留鳥
71			ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	○	+	○		冬鳥
72			タヒバリ	<i>Anthus spinoletta</i>	○				—
73			サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	○	++	○	

74		ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	○	++ +	○		留鳥
75		モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	○	++	○		留鳥
76		レンジャク	キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>	○				—
77			ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>	○				—
78		カワガラス	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	○	++	○		留鳥
79		ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	○	+	○		冬鳥・留鳥
80		イワヒバリ	カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	○				—

表 4.4.1.2-7(3) 鳥類の確認種<sup>1)</sup>

81	スズメ	ツグミ	コマドリ	<i>Erithacus akahige</i>	○				—	
82			ノゴマ	<i>Luscinia calliope</i>	○				—	
83			コルリ	<i>Luscinia cyane</i>	○				—	
84			ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	○	+			冬鳥	
85			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>	○	++	○		冬鳥	
86			ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	○				—	
87			イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>	○				—	
88			トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	○	+	○		留鳥	
89			クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	○				—	
90			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	○				—	
91			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	○	+			冬鳥	
92			マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	○				—	
93			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	○			○	冬鳥	
94			ウグイス	ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>	○	+	○		夏鳥
95				ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	○	++ +	○		留鳥

96		センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	○	+	○		夏鳥
97		クウイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	○				—
98		セツカ	<i>Cisticola juncidis</i>	○				—
99	ヒタキ	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	○	+	○		夏鳥
100		オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	○	++	○		夏鳥
101		サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	○				—
102		エゾビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>	○			○	その他
103		コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	○				—
104	カササギ ヒタキ	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudate</i>	○		○		夏鳥
105	エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	○	++	○		留鳥
106	シジュウ カラ	コガラ	<i>Parus montanus</i>	○	+			留鳥
107		ヒガラ	<i>Parus ater</i>	○			○	留鳥
108		ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	○	++	○		留鳥
109		シジュウカラ	<i>Parus major</i>	○	++ +	○		留鳥
110	ゴジュウ カラ	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	○				—
111	キバシリ	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	○				—
112	メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	○	++	○		留鳥
113	ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	○	++ +	○		留鳥
114		ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	○				—
115		カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	○	++			冬鳥
116		ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	○	+			冬鳥
117		ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	○				—
118		アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	○	++	○		冬鳥

119			クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	○	+			冬鳥
120		アトリ	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	○				—

表 4.4.1.2-7(4) 鳥類の確認種<sup>1)</sup>

121	スズメ	アトリ	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	○	++	○		留鳥
122			マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	○		○		冬鳥
123			ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	○			○	冬鳥
124			ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	○			○	冬鳥
125			コイカル	<i>Eophona migratoria</i>				○	冬鳥
126			イカル	<i>Eophona personata</i>	○	++	○		留鳥
127			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	○				—
128			ハタオリ ドリ	ニューナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	○			
129	スズメ	<i>Passer montanus</i>		○	+			留鳥	
130	ムクドリ	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	○				—	
131	カラス	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	○	+	○		留鳥	
132		ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	○	++	○		留鳥	
133		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	○	++	○		留鳥	
134	(キジ)	(キジ)	(コジュケイ <sup>5)</sup> )	<i>(Bambusicola thoracica)</i>	○	++	○		留鳥
135	(ハト)	(ハト)	(ドバト <sup>5)</sup> )	<i>(Columba livia)</i>			○		その他
136	(スズ メ)	(チメド リ)	(ソウシチョウ <sup>5)</sup> )	<i>(Leiothrix lutea)</i>		+			その他
計	16	45	136		133	87			

1) 分類及び和名は「日本鳥類目録」(日本鳥学会編、平成9年6月、日本鳥学会誌46号No.1)にしたがった。

2) 文献は以下のものの五木村及び相良村のデータを使用した。

①「人吉球磨五木五家荘地区自然公園候補地学術調査報告書」(熊本県、昭和44年3月)

②「五木村学術調査 自然編」(五木村総合学術調査団、昭和62年1月)



3) ラインセンスについては、平成4年度調査結果より便宜上4コース(各2km程度)で、早春、春、夏、秋及び冬に各1回ずつ行った調査結果の合計値を次の区分により示した。

+:1~10羽、++:11~100羽、+++:101羽以上

定点観察については、平成4年度及び7年度の調査結果による出現状況を示す。

随時については、昭和52年度、平成4年度、5年度及び6年度の調査結果による出現状況を示す。

4) 渡りの区分は調査区域内におけるもので、以下のとおりである。観察例が少ないものについては、熊本県内の他地域の観察資料を参考として推察した。

留鳥:調査区域に一年中とどまって、ほとんど季節的な移動をしない野鳥。

夏鳥:春、調査区域に渡来して繁殖し、秋、渡去する野鳥。繁殖は未確認だが、夏、定期的に長期間みられる野鳥も含めている。

冬鳥:秋、調査区域に渡来して越冬し、春、渡去する野鳥。

その他:上記以外の野鳥。

ー:現地調査で確認されていないため、渡りの区分が不明な野鳥。

5) 帰化鳥(コジュケイ、ドバト及びソウシチョウ)についてはカッコで示し、末尾に記載した。

表 4.4.1.2-8 重要な鳥類

No.	種名	文献	現地調査	選定根拠 <sup>1)</sup>				
				①	②	③	④	⑤
1	ヒシクイ	○		国			VU	
2	ミサゴ	○	○				NT	
3	ハチクマ	○	○				NT	R
4	オオタカ	○	○		I		VU	R
5	ハイタカ	○	○				NT	
6	クマタカ	○	○		I		EN	V
7	チュウヒ	○					VU	R
8	ハヤブサ	○	○		I		VU	R
9	ウズラ	○					DD	
10	タマシギ	○						R
11	コアジサシ	○					VU	R

12	アオバズク	○	○					R
13	フクロウ	○	○					R
14	ヨタカ	○						R
15	アカショウビン	○	○					R
16	ブッポウソウ	○	○				VU	V
17	ヤイロチョウ	○	○		I		EN	V
18	サンショウクイ	○	○				VU	
19	コマドリ	○						R
20	クログミ	○						R
21	コサメビタキ	○						R
22	サンコウチョウ	○	○					R
23	ノジコ	○					NT	
計	23	23	13	1	4	0	14	17

1) 重要な種の選定根拠は以下のとおりである。なお、④⑤の定義の詳細については、巻末の資料編に示した。

①「文化財保護法」、「熊本県文化財保護条例」により天然記念物に指定されている種

特:国指定特別天然記念物 国:国指定天然記念物 県:県指定天然記念物

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」で指定されている種

I:国内希少野生動植物

③「熊本県希少野生動植物の保護に関する条例」で指定されている。

④「環境庁報道発表資料 哺乳類及び鳥類のレッドリストの見直しについて」に記載されている種

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧 IA類 EN:絶滅危惧 IB類 VU:絶滅危惧 II類

NT:準絶滅危惧 DD:情報不足

⑤「熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと」に記載されている種(※フクロウはキュウシュウフクロウとして記載)

Ex:絶滅 E:絶滅危惧 V:危急 R:希少 DD:情報不足

2) ビンズイは⑤においてDD(情報不足)として記載されているが、湛水予定区域とその周辺区域においては繁殖の可能性が低いため、ここでは重要な鳥類として選定していない。

## ② 個別調査結果

### a クマタカの生息調査結果

平成12年3月までに、87地点でのべ調査員約1200名により調査を実施し、ダムサイト周辺ではおおむね700時間以上、湛水予定区域の上流部とその周辺区域ではおおむね400時間以上の観察を行った。

クマタカは調査区域の全域にわたって確認され、その確認回数は、繁殖つがいとその幼鳥、繁殖にかかわっていない亜成鳥なども含め、2400回以上にのぼった。

また、事業区域に関連するものとして、主要な尾根を境とした大きな谷を基本に、7つがいのクマタカの生息を確認し、繁殖活動や幼鳥の巣立ち(5つがいでのべ9回確認)などを確認した。探餌行動は各つがいで確認されたが、広葉樹林を主に利用するつがいもあれば、スギ・ヒノキ植林を主に利用するつがいもあった。

調査区域のうち、山口谷川と川辺川の合流点付近から宮目木川と川辺川の合流点付近にかけての範囲では、川辺川への主要な流入支川の流域を1単位として、4つがいが生息していた。それより上流部の3つがいについては、1つがいが五木小川への主要な流入支川の流域を1単位として生息し、残りの2つがいは川辺川をまたぐ区域に生息していた。

これらの調査結果にもとづき、現時点で、おおむねクマタカの生息環境やつがいごとの行動圏の内部構造(コアエリア、繁殖テリトリー及び幼鳥の行動範囲)を分析した。

### b ヤイロチョウの生息調査結果

ヤイロチョウは広葉樹林の溪谷などを主な生息環境としている。湛水予定区域外で確認された。

### c ヤマセミの生息調査結果

図4.4.1.2-10に示すとおり、個体識別された個体の飛翔状況などから、調査区域において6つがいの行動圏をおおむね把握した。

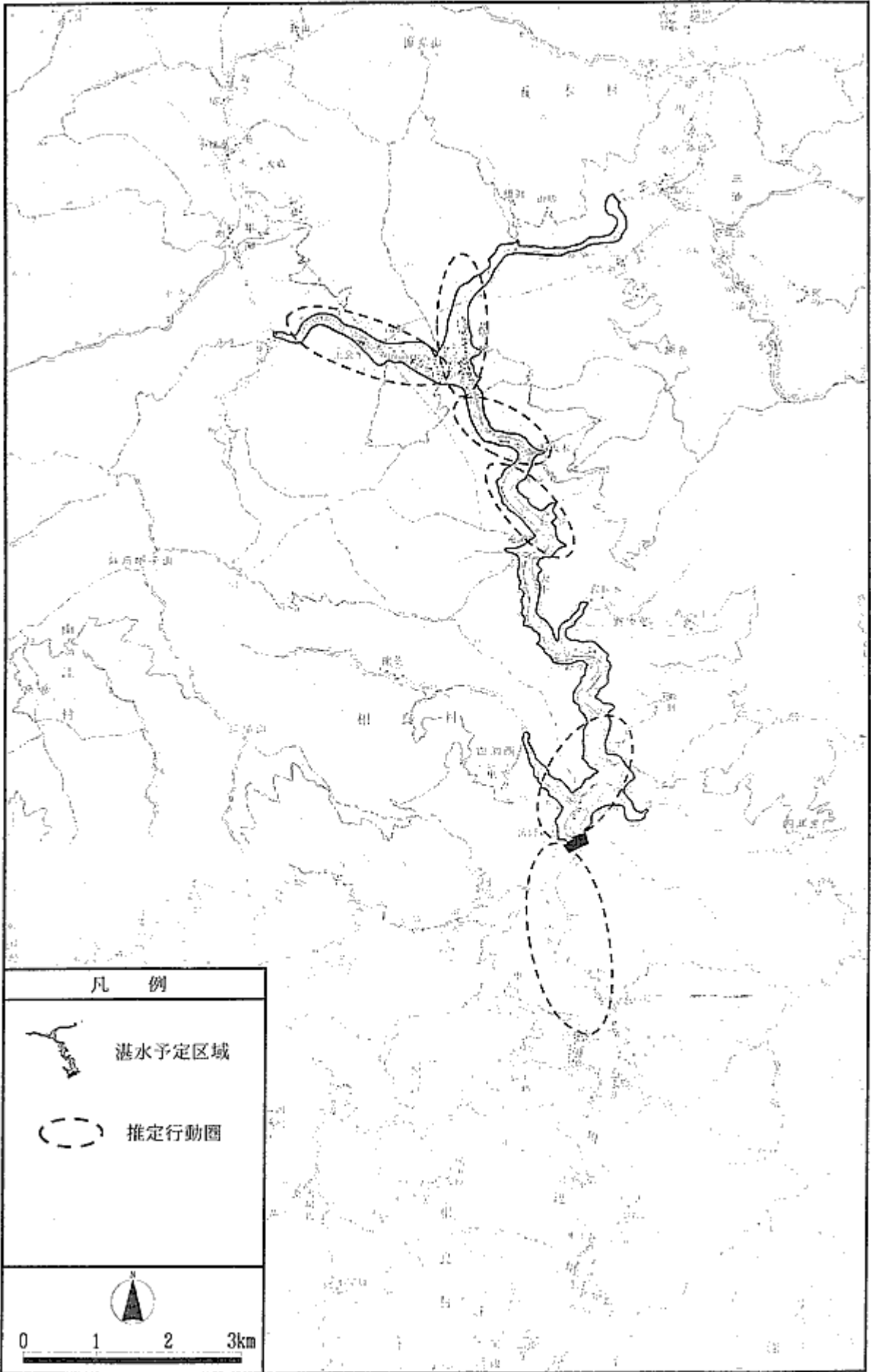


図 4.4.1.2-10 ヤマセミの生息調査結果